

<ニュースリリース>

## 第2回神儒仏合同シンポジウム 心の通い合う社会を求めて～いのちを生きる～

神田神社（神田明神＝神道）、斯文会（湯島聖堂＝儒学）、東方研究会（東方学院＝仏教）の3者は、昨年に引き続き今年も「神儒仏合同シンポジウム」（心の通い合う社会を求めて～いのちを生きる～）を開催します。

日時：8月7日（土）午後1時～4時30分、場所：神田神社・明神会館

2010年7月  
神儒仏合同シンポジウム実行委員会  
宗教法人神田神社（神田明神）  
財団法人斯文会（湯島聖堂）  
財団法人東方研究会（東方学院）

神儒仏合同シンポジウムは、2008年6月8日に3法人の地元ともいえる東京・秋葉原で起きた無差別殺傷事件をきっかけに始まりました。事件は、現代社会から人と人との繋がりが失われ、特に若者たちが孤独に追いやられている現状を浮き彫りにしましたが、3法人は、こうした状況を少しでも良い方向に変えていくためには、立場の違いを乗り越えて協力すべきとの考えで一致し、昨年、初の合同シンポジウムを開きました。

幸いこの試みは多くの方々に支持され、共感を得られたため、3法人は内容をより深めながら今後も継続していくことを決め、今年、第2回のシンポジウムを開催することとしました。3法人はこの活動を通じて「心の社会貢献」をしていきたいと考えており、併せて神儒仏の対話による相互理解と協調を図っていく所存です。

今年のテーマは「いのちを生きる」。自殺者は毎年3万人を超え、安易に人を傷つけ殺める事件も少なくありません。また都会の孤独死も年々増え続けています。こうした悲劇を少しでも減らしていくためには、人間としてのより根源的な「生」、すなわち万物に生かされている「いのち」の大切さに一人ひとりが気づくことが何より必要とわれわれは考えています。現代社会のさまざまな「死」を媒介としながら、人間の「いのち」をどう生きるか、神儒仏それぞれの歴史と伝統に基づいて考えてみようというのが今回のシンポジウムの目的です。

神道からは三橋健氏（國學院大學大学院客員教授）が「なぜ『いのち』は大切なのか—神道の立場から—」をテーマに、儒学からは加地伸行氏（立命館大学教授、大阪大学名誉教授、文学博士）が「日本人の真の宗教心—儒教の宗教性」をテーマに、仏教からは篠原鋭一氏（曹洞宗長寿院住職、NPO自殺防止ネットワーク「風」理事長）が「無縁社会（孤立社会）から有縁社会への回帰」をテーマにそれぞれ講演。そののち講演内容をもとに意見交換を行います。

なお、応募要項、シンポジウム概要、講演者のメッセージは以下の通りです。

**第2回神儒仏合同シンポジウム**  
「心の通い合う社会を求めて～いのちを生きる～」

<応募要項>

日時 : 2010年8月7日(土) 午後1時～4時30分(予定)  
会場 : 神田神社・明神会館 東京都千代田区外神田2-16-2  
定員 : 150名  
参加費 : 2,000円  
応募〆切 : 8月7日(土) 午前中  
応募要項 : 1) メールでのお申込先 [mind@kandamyoujin.or.jp](mailto:mind@kandamyoujin.or.jp)  
2) 電話でのお申し込み先 (財)東方研究会 TEL 03(3251)4081

応募要項、シンポジウムに関する一般の方のお問い合わせ先  
(財)東方研究会 TEL 03(3251)4081

<シンポジウム概要>

開会 三法人代表挨拶 大鳥居 信史 神田神社宮司  
講演 儒学 : 「日本人の真の宗教心—儒教の宗教性」  
加地 伸行 立命館大学教授 大阪大学名誉教授 文学博士  
講演 仏教 : 「無縁社会(孤立社会)から有縁社会への回帰」  
篠原 鋭一 曹洞宗長寿院住職 NPO自殺防止ネットワーク「風」理事長  
休憩 10分  
講演 神道 : 「なぜ『いのち』は大切なのか—神道の立場から—」  
三橋 健 國學院大學大学院客員教授  
休憩 20分  
講演者による意見交換  
コーディネーター 武田道生 淑徳大学教授 浄土宗龍泉寺住職  
※意見交換では事前に参加者の質問を受付けます。

本資料に関するお問い合わせ先  
神儒仏合同シンポジウム実行委員会

神田神社 広報担当 岸川・清水 TEL03(3254)0753  
または スポンタネアティ 笛木 TEL&fax 03(5912)6621

お手数ですがご掲載賜ります折には、ご一報くださいますようお願い申し上げます

<資料—講演者メッセージ>

**儒学：「日本人の真の宗教心—儒教の宗教性」**

加地伸行 立命館大学教授 大阪大学名誉教授 文学博士

(かじ のぶゆき 1936年生まれ、大阪在住。「沈黙の宗教—儒教」「儒教とは何か」他著作多数)

宗教が人々を動かし、また人が宗教に魅せられるのは、死について語るからである。その語る世界はさまざまである。すなわち多くの宗教が現れ、消えてゆき、生き残ったものが、今日においてよく知られている宗教となっている。

そうした宗教の一つが儒教である。しかし、世の中の人の多くは、儒教の宗教性を知らず、道徳性ばかりを言っている。これは根本的に誤っている。神道に宗教性と道徳性とがあり、仏教に宗教性と道徳性があるのと同じことなのに。

神・儒・仏そのいずれもが死について語っているがゆえに、今もなお人々の心を捉えているのである。この<死への覚悟と理解と>があつてはじめて<生きる意味>が明確となる。それは死生観を持つということである。(専攻は中国哲学史)

---

**仏教：「無縁社会（孤立社会）から有縁社会への回帰」**

篠原鋭一 曹洞宗長寿院住職 NPO 自殺防止ネットワーク「風」理事長

(しのはら えいいち 1944年生まれ、成田市在住。24時間自死念慮者の電話を受け付ける。

「みんなによんでほしい本当の話」近書に「もしもし生きていいですか？」他著作多数)

今年一月末に放送されたNHKスペシャル「無縁社会」という番組が大きな話題を呼びました。およそ20年にわたって6千人以上の自死念慮者と対話活動を続けて来ました私にはすでに予想されていたことであり、私はマスコミ等を通じて「孤立社会がやってくる」と主張してきましたが、その時が来たと思えてなりません。

今こそ宗教者は「無縁社会（孤立社会）から有縁社会への回帰」をテーマに実動することが急務と考えます。

---

**神道：「なぜ『いのち』は大切なのか—神道の立場から—」**

三橋健 國學院大學大学院客員教授

(みつはし たけし 1939年生まれ、鎌倉市在住。「神々の原影」「国内神名帳の研究」「日本人と福の神」他著作多数)

神さまは人間に「いのち」を「授けられた」のではなく、「寄（よ）さされた」のである。これが神道の伝統的な生命観である。もし「授けられた」のであれば、「授けられた」その時から「いのち」は人間のものとなり、神さまとのつながりも無くなる。しかし、「寄さされた」のであるから、「寄さされた」後も、「いのち」という絆によって神さまと人間は結ばれていることになる。ただし、「よ（寄）さす」は深遠く容易に理解できない古語の一つで、しかも「みこともち」という古語と相俟って用いられる場合が多く、そこに深い思想がみられる。それゆえ、現代語に直すのには困難がともなう。

現在、「いのち」を軽視する風潮がみられる。それは神さまが「いのち」を「寄さされた」ということを忘れたところに原因がある。「いのち」は神聖で、かつまた最も大切なものであることを、神道のキーワードの一つ「寄さす」を通して考えてみたいと思う。